『妄想アンソロジー式ミステリガイド』
探偵小説研究会・編著（書肆侃侃房）

「こんなアンソロジーを編んでみたい」という探偵小説研究会会員の発想から生まれた、架空アンソロジーの見本帳です。何しろ架空なので、実際のアンソロジーを編む時なら意識せざるを得ないページ数や価格の制限などを気にすることなく、会員がのびのびと夢を語っています。（千街）

◇◇◇

『〈怪異〉とミステリ　近代日本文学は何を「謎」としてきたか』
小松史生子ほか・編著（青弓社）

ミステリは怪異現象を合理主義で解決する志向性を持ちながら、怪談の話型と非常に近しい語りの構造を有しています。本書は、明治から令和にわたるバラエティ豊かで具体的な作品分析を通して、怪談における「恐怖」とミステリにおける「謎」とが交錯する物語構造の魅力や問題点を、読者にわかりやすく伝える論文集です。（小松）

『クトゥルフ神話検定　公式テキスト』
朱鷺田祐介・監修、笹川吉晴ほか・著（新紀元社）

クトゥルー神話ってなんかいっぱい神様の種類がいて分かりにくいし、マニアはいろいろうるさくて面倒そうだし、そもそも「クトゥルー」なの？　それとも「クトゥルフ」なの？　一見にはちょっと――と諦めているあなた。本書で基本を学び、紹介されている作家・作品を読めばクトゥルー恐るるに足らず。Let's Try ！（笹川）

『半鐘の怪　半七捕物帳ミステリ傑作選』
末國善己・編（創元推理文庫）

捕物帳というジャンルを確立した岡本綺堂『半七捕物帳』の中から、本格ミステリの傑作を一八本セレクトしました。編者解説は、綺堂が「近代に入り失われていく江戸の面影を残すために捕物帳を書いた」という定説に疑義を唱えるなど、従来とは違う『半七捕物帳』論になっています。（末國）

『君を恋ふらん　源氏物語アンソロジー』
末國善己・編（角川文庫）

『源氏物語』のアレンジ（田辺聖子、瀬戸内寂聴）、歴史小説（永井路子）、ミステリ（森谷明子）、伝奇小説（澤田瞳子）と、紫式部・『源氏物語』に関係する短編を五作選びました。赤染衛門が語り手の永井紗耶子「栄華と影と」は書き下ろしです。二〇二四年の大河ドラマ『光る君へ』の予習にいかがでしょうか。（末國）

『現代ミステリとは何か　二〇一〇年代の探偵作家たち』
蔓葉信博・編著、限界研・編（南雲堂）

青崎有吾や斜線堂有紀など二〇一〇年代デビューの気鋭の作家を、特殊設定ミステリといったジャンル内の発展を踏まえつつも、縦横無尽に論じた作家論集。探偵小説研究会の法月、円堂が選んだメフィスト評論賞受賞者も参加しており、新鋭評論家の新しい視点にも注目頂きたい。（蔓葉）

『法月綸太郎ミステリー塾　怒濤編　フェアプレイの向こう側』
法月綸太郎（講談社）

ライフワークとなりつつある「法月綸太郎ミステリー塾」シリーズの第四巻。平成本格の俊英たちを後方支援しながら、昭和時代のレジェンド作品へさかのぼり、そこから海外ミステリの歴史に視線を転じていく三部構成で、表題作は二十年ぶりに書いた渾身のロスマク論です。（法月）

『日本探偵小説を知る　一五〇年の愉楽』
諸岡卓真ほか・編著（北海道大学出版会）

日本文学や映画の研究者による論文集です。第一部には日本ミステリの歴史とその変容を概観できる論文を集めました。第二部は「日常の謎」や最新のガジェットなど、様々な角度から作品に切り込む各論です。第三部には北海道在住の作家・評論家による座談会を収録しています。（諸岡）

『本格ミステリの本流　本格ミステリ大賞 20 年を読み解く』
浅木原忍・乾くるみ・円堂都司昭・大森滋樹・佳多山大地・千街晶之・千澤のり子・蔓葉信博・法月綸太郎・波多野健・諸岡卓真ほか（南雲堂）

年間の優れた本格ミステリ小説と評論・研究を顕彰する「本格ミステリ大賞」。その小説部門の歴代受賞作を論じることで、今世紀に入ってからの本格ミステリの歴史そのものを振り返る企画です。読み応えのある力作評論が揃っています。（千街）

『ミステリ映像の最前線　原作と映像の交叉光線』
千街晶之（書肆侃侃房）

ミステリ小説や漫画の映像化で行われる改変は、どんな理由に基づくものなのか。アガサ・クリスティー、横溝正史、東野圭吾らの映画化やドラマ化を通して、今世紀のさまざまな原作つきミステリ映像の改変に込められた意図を細かく読み解く評論です。（千街）

『21 世紀本格ミステリ映像大全』
千街晶之・編著、秋好亮平・末國善己・蔓葉信博・羽住典子ほか（原書房）

かつて本格ミステリは映像化には向かないと言われていましたが、その状況は近年になって一変しています。映画、ドラマ、アニメ、バラエティ番組など、さまざまな映像ジャンルから本格ミステリの傑作・秀作を紹介する、類例のないガイドです。（千街）

『文學少女の友』
千野帽子（青土社）

この本では、探偵小説・小川洋子・吉田健一・芥川賞選評・人形愛文学・軽井沢文学・ニート文学について書いています。どれかひとつでも気になるかたには、ほかの話題もおもしろく読める本になっています。騙されたと思ってぜひ！（千野）

『人はなぜ物語を求めるのか』
千野帽子（ちくまプリマー新書）

文学理論・自己啓発・心理学・宗教・ビジネス書などいろんな分類をされた本。高校・大学入試や模試の国語の問題にもよく使われています。千野帽子の著作中いちばん愛されてる本であることは間違いありません。プレゼントに最適！（千野）

『ミステリースクール』
円堂都司昭・佳多山大地・末國善己・千街晶之ほか（講談社）

講談社のＭＲＣ（メフィスト・リーダーズ・クラブ）でＬＩＮＥ連載されていた、評論家や書店員による講座の書籍化。新本格、古典、ライトノベル、社会派、特殊設定、警察小説などテーマ別のブックガイドになっており、わかりやすい語り口も読みどころです。（千街）

『書評七福神が選ぶ、絶対読み逃せない翻訳ミステリベスト　2011-2020』　千街晶之ほか（書肆侃侃房）

七人の書評家が事前の打ち合わせなしで毎月の月間ベストを選ぶという、「翻訳ミステリー大賞シンジケート」の名物連載「書評七福神」の書籍化です。一つの作品に票が集中する時あり、七人全員がバラバラの作品を推す時あり、月ごとに予想の出来ない結果が出るので楽しめます。（千街）

『新本格ミステリはどのようにして生まれてきたのか？　編集者宇山日出臣追悼文集』
太田克史・編、佳多山大地・千街晶之・巽昌章・戸川安宣・法月綸太郎ほか（星海社）

綾辻行人ら多くの作家を世に送り出し、「新本格の生みの親」と呼ばれた講談社の名編集者・宇山日出臣の業績を振り返る一冊。故人の人柄を偲ぶことが出来る追悼文のほか、探偵小説研究会会員の佳多山大地・千街晶之・巽昌章による座談会なども収録されています。（千街）

『十四人の識者が選ぶ本当に面白いミステリ・ガイド』
杉江松恋・監修、荒岸来穂・千街晶之ほか（Ｐヴァイン）

基礎として読んでおくべき巨匠と、ここ十年でデビューして活躍中の勢いのある新鋭に絞って、国内・海外合わせて二十人の作家を紹介するという、今まで存在しなかった着眼点のミステリ・ガイドです。クリス・ウィタカー、月村了衛のインタビューにも要注目。（千街）